

## 中洲からの脱出

近年、鴨川において、北大路上流の中洲が温存されています。

そのため、鴨川では、北大路上流の中洲において、イカルチドリ、コチドリ、カルガモ、アイガモマガモがたくさん繁殖しています。

そのなかで、イカルチドリとコチドリの観察はとてもおもしろいものです。しかし、野鳥観察者の人気はあまりないようにおもわれます。

繁殖地の中洲における縄張り争い、求愛行動、巣の場所の選定、抱卵、孵化、子供の監視と保護、外敵への警戒、それらが目の前で京都市民の知らぬ間に行われています。野鳥の会の人たちはいかがでしょう。

少人数で岸からでの観察は、チドリたちの行動に何ら不安やストレスを与えるものではありません。上手く環境に溶け込んでいるので動かないと分かりません。見つけても少しでも目をそらすとどこにいるのか分かりません。それほど、チドリの姿や色は中洲の環境に溶け込んでいます。巣は砂礫地の窪みであり、卵はそこらにある小石とそっくり、雛も小石が二つ並んだようなものであります（頸部が白い羽であるので、頭部と胴部が分断された模様となり、大小の小石2個に見える）。

彼ら（チドリたち）は、きっと人間には自分たちの存在が分かっていないであろう、とおもっているようにおもえます。

彼らの敵は、だませる小動物やヒトではなく、だませない（鳥を知らない、鳥など眼中にない）ヒトやイヌに踏みつけられることにあります。また、大きな河原では侵入するランドクルーザやバーベキューをするヒト達でしょうか。

チドリたちが、この京都市の身近な地で、すべての行動が裸で丸見えなのに、繁栄を続けているのは、カモフラージュが完璧であるからとおもわれます。

イカルチドリとコチドリの生態については、後日まとめることにしていますが、今回の報告は、いまは梅雨時であり、大雨情報があるので、あわ

ててまとめてみました。整理不十分なところがありますがお許してください。

鴨川が増水し中洲が水没でもしたら、鴨川の中洲のチドリたちはどのように、この苦難を乗り越えるのであろうかと、とても心配であります、みなさんもそうおもわれるのではないのでしょうか。チドリたちが、カモフラージュできて外敵に対して備えは完璧であっても、鴨川が増水による中洲の水没すなわち自然の力に対しては対応の仕方がないのでは、とネ。

卵を1日1個産んで4日間、卵を温めて21～23日、孵化して雛が飛べるようになるのに3週間、その間に中洲が水没となると大変なことが予想されます。

親鳥は、卵は別の地に運ぶことはできません。卵は諦めましょう。しかし、誕生したがまだ飛べない雛は、増水によって流されるだけでしょうか、なすすべもなく流されるわが子を親はただみているだけなのでしょう。そうだとすれば、親鳥にとって、これほど悲しいことはありません。

昨年の出来事ですが、大雨のあと雛が気になり繁殖地をみに行きましたところ、少しの増水であったため、流が強くないため、少し大きな中洲の方に移動していくところを偶然観察することができました。この手があったのだ。“ヤッホー”。

その翌日は、また大変な増水です。その中洲も水没です。川は相当の濁流です。それを見て私は愕然としましたが、岸に上がって休んでいる雛を確認しホット胸をなでおろしたのです。

今回は、そのドラマの報告であります。取り急ぎまとめましたので、乱文失礼いたします。



浅瀬を走る雛。まだ経度増水、走って移動 2014/ 07/02



水没するであろう洲で不安げな雛3羽

この繁殖では、4羽孵化したが、孵化直後に1羽が保護され、3日後死亡、この雛たちは孵化後5日ぐらいとおもわれた



すぐ横の小さな洲に移動。足が届くのであろうか 2014/0 7/0 2



大きな洲に移動するため川に入る雛 親が誘導しているのだろうか  
2014/ 07/04



躊躇なく川に入る、泳ぐことは覚悟の上か、怖くないのか



ここではもう脚は立たないだろう、とおもわれる



残る雛2羽も後に続く。親が誘導しているのだろう



この2羽も躊躇なく入水。淡々と恐怖なく行動している



ここも深そうだ。泳いでいるとおもわれる



一つ目の難関を泳ぎ切る



小さな洲に上がればそこには親鳥が待っていた（親は草に隠れて見えにくい）。（2羽の雛と右端には親鳥）



その待っていてくれた親に甘えず、無言で通りすぎて、次の洲へ移動





また少し泳がなければならない



親は、2羽の雛の誘導のため、飛び上り、前方へ。 2羽の雛とその上を飛ぶ親鳥、次の誘導のために前方へ



2羽の雛はまた泳がなければならない



親の待つところへ一直線



親のところまで、もう少しだ



やっと親の元に、とおもったのだが



あれあれ、また、親に甘えることなく、素通りだ



やっと大きな洲の端に到着。3羽集合する。私はホッとする



その3日後、また増水した。今度は岸に上がっていた。ひどい増水であり、激流なのだが、か弱い雛の泳ぎ力で泳ぎ切ったのか、まだ飛べないはずだが。3雛確認しよろこんだところ

2014/07/07



疲れているのだろうか、よく座り込んでいた。



護岸場所だけでは餌が少ない。護岸壁を登らねば、餌にありつけない。親鳥は、警戒、保護や注意はしてくれるが、一切餌を運んでくれない



堤防斜面や河川敷は餌が豊富だが、散歩人、イヌ、自転車の往来が多い。しかし、このコチドリ達の存在に気が付いている人は意外と少ない。たとえ気が付いたとしても、「スズメかあ」ということか



親は常に付き添って、雛を危険から守っている



親は、常に辺りを警戒している

以上、チドリの雛は泳ぐことができる、という事実の報告であります。

もう少しお付き合いください。

チドリは「なぜ泳ぐのか」については、生息地が水没するばあい、泳げなければ生き延びれないからであります、

「なぜ泳げるのか」について、昨年、考えなかったのです、考え付かなかったのです。

今年、ふとおもったのです。泳ぐには水かきが必要なのではと。チドリの足に水かきがあるのがいるので（ミズカキチドリ）、ひょっとして鴨川のチドリにも、とおもい、撮影した写真を注意深くみることにしました。

すると、コチドリの雛そして親に、また、イカルチドリの雛と親に、わずかではあります、水かきがあるのを写真確認しました。

また、「シギ・チドリ類 ハンドブック」氏原巨雄・氏原道昭 著 には、ミズカキチドリ、ハジロコチドリ、ヒメハマシギ、ヒレアシトウネン、トウネンの水かきの図が記載されていますが、今回、写真判定したイカルチドリとコチドリの水かきも彼らに匹敵するほどのものであります。その拡大写真をご紹介します。



コチドリ雛の水かき



コチドリ成鳥の水かき





イカルチドリの雛の水かき（裏）                      （表）

イカルチドリの成鳥にも同じように認められました。

さて、今夜も雨が降っていて、鴨川のコチドリ・イカルチドリの雛たちのことがとても心配なのですが、神が彼らに与えた水かきによって、この難局を乗り越えて、元気に成長してくれることを願っています。

最後までありがとうございました。

なお、以前、メーリングリストの隠し戸棚に報告しました

「シギの足図について」と「コアジサシ・コチドリ 2009 年」をもう一度ご覧下さいませ

2015年6月26日

三宅 慶一